

世間は広いようで狭い③

先月の「『栢高の日』新聞 第5号」で取り上げたように、私の縁のある著名人三人の内の二人目は、大学時代の一学年後輩で、「ホンマでっか!?TV」などのテレビ番組でもおなじみの脳科学者の澤口俊之君でしたが、いかがでしたでしょうか。生徒諸君の中には将来研究者などを目指している方も多いと思いますが、夢の実現には様々な困難が待ち受けていると思いますが、常に多くの情報を収集し、節目節目で後々悔いの残らない最善の方向を選択できるような能力を身に付けましょう。今回は私の縁のある著名人三人の内の最後の三人目として、私と同じ鹿沼市出身の元NHK記者でノンフィクション作家、評論家の柳田邦男氏を紹介いたします。

柳田邦男氏のこと

今はもっなくなりましたが、子どものころ、鹿沼市の今宮神社の隣にあった中年の御夫婦が営む「柳田書店」という古本屋によく通っていました。星新一、小松左京、盾村卓、光瀬龍、筒井康隆などのジュブナイル小説やSF小説にはまっていた私は、本屋の新刊本は高くて手が出ませんでしたので、小銭を握りしめて「柳田書店」に自転車で行って、数年前に出版された新刊本の古本を購読するのが楽しみでした。また、「柳田書店」にはなぜか辞書や参考書の古本がらんだんにあり、中学校や高校で使う辞書や参考書の多くを格安で購入したのを覚えてます。

時は流れ、私が足尾高校の教員になって3年が過ぎた夏休みの1985（昭和60）年8月12日に、世界最悪の航空機事故といわれた「日本航空123便墜落事故」が発生しました。生徒諸君も毎年夏休みにその慰霊祭が報道されるのでよくご存じのことと思いますが、日本航空123便は群馬県多野郡上野町の御楽鷹山の尾根に墜落しました。単独機の航空機事故として死者数世界最多（死者数520名）で、今でもその凄惨な事故のことは強い衝撃と共に脳裏に焼き付いています。その夜のNHK報道特別番組に航空評論家として出演したのが柳田邦男氏でした。柳田邦男氏のプロフィールの中に「栢木県鹿沼市出身」とのテロップがあり、父親に確認したところ、先ほど話した「柳田書店」が実家であることが分かりました。私が子どものころに夢になって通っていた「柳田書店」は柳田邦男氏のお兄さん夫婦が先代の跡を継いで経営していた古本屋だったのです。

柳田邦男氏は、1936（昭和11）年に鹿沼市（当時は鹿沼町）に生まれ、鹿沼高校を卒業し東京大学経済学部に進学します。1960年に東京大学を卒業後、NHKに入局しました。NHK時代には、遊軍記者として全日空羽田沖墜落事故、カナダ太平洋航空機墜落事故、BOAC機空分解事故を取材し、1971年にこれらの事故を追ったルポルタージュ『マッハの恐怖』を発表し、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞します。

1974年にNHKを退職した後は、現在までノンフィクション作家として活躍しています。1979年に設立当初の国立がんセンター（現国立がん研究センター）を舞台に、がんの臨床医・研究者の活躍を描いた『ガン回廊の朝』で講談社ノンフィクション賞を受賞しました。また、1995年には、精神を病んだ次男の自殺と脳死による献腎の決意を描いた『犠牲（サクリファイス） わが息子・脳死の11日』を発表し、文藝春秋読者賞、菊池寛賞を受賞しました。1997年には『脳治療革命の朝』で、2013年には『原発事故 私の最終報告書』で文藝春秋読者賞を受賞しています。

<略歴>

1936年6月9日 栃木県鹿沼町（現鹿沼市）に生まれる
 1954年3月？ 栃木県立鹿沼高等学校卒業
 1960年3月 東京大学経済学部卒業
 1960年 NHK入局、広島放送局へ配属
 1963年 東京の社会部に配属
 1974年 NHK退職
 2005年7月 安全アドバイザーリーググループ座長（日本航空）
 2005年 水俣病問題に係る座談会委員（環境省）
 2008年 「開かれた新聞」委員会委員（毎日新聞社）
 2011年5月 政府の東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会メンバー
 2016年 司馬遼太郎賞、吉川英治文化賞の選考委員

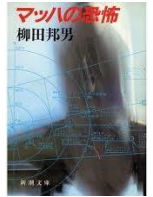
<主な受賞歴>

◎1971年 『マッハの恐怖』で大宅壮一ノンフィクション賞
 ◎1979年 『ガン回廊の朝』で講談社ノンフィクション賞
 ◎1984年 ボーン・上田記念国際記者賞
 ◎1986年 日本放送協会放送文化賞

◎1995年 『犠牲（サクリファイス） わが息子・脳死の11日』で菊池寛賞、文藝春秋読者賞
 ◎1997年 『脳治療革命の朝』で文藝春秋読者賞
 ◎2013年 『原発事故 私の最終報告書』で文藝春秋読者賞

<主な著書>

『マッハの恐怖 連続ジェット機事故を追って』（1971）
 『続マッハの恐怖 連続ジェット機事故鎮魂の記録』（1973）
 『航空事故 その証跡に語らせる』（1975）
 『空白の天気図』（1975）
 『失速 ロッキード破局の風景』（1976）
 『零式戦闘機』（1977）
 『新幹線事故』（1977）
 『大いなる決断』（1978）
 『ガン回廊の朝』（1979）
 『マリコ』（1980）
 『ガン50人の勇氣』（1981）
 『明日に刻む闘い ガン回廊からの報告』（1981）
 『事実を見る眼』（1982）
 『恐怖の2時間18分』（1983）
 『零戦燃ゆ 飛翔編』（1984）
 『フェイス3の眼』（1984）
 『撃墜 大韓航空機事件』（1984）
 『ブラック・ボックス 追跡一大韓航空機事件』（1985）
 『最新医学の現場』（1985）
 『死角 巨大事故の現場』（1985）
 『「死の医学」への序章』（1986）
 『事実の考え方』（1987）
 『ガン回廊の炎』（1989）
 『事故調査』（1994）
 『かけがえのない日々』（1994）
 『犠牲（サクリファイス） わが息子・脳死の11日』（1995）
 『いのち 8人の医師との対話』（1996）
 『20世紀は人間を幸福にしたか』（1998）
 『この国の失敗の本質』（1998）
 『脳治療革命の朝』（2000）
 『言葉の力、生きる力』（2002）
 『元気が出る患者学』（2003）
 『砂漠でみつけた一冊の絵本』（2004）
 『壊れる日本人 ケータイ・ネット依存症への告別』（2005）
 『大人が絵本に涙する時』（2006）
 『人の痛みを感じる国家』（2007）
 『生きなおす力』（2009）
 『いつでも心に音楽が流れていた』（2009）
 『人生やり直し読本一心の涸れた大人のために』（2010）
 『僕は9歳のときから死と向きあってきた』（2011）
 『「想定外」の震 大震災と原発』（2011）
 『言葉が立ち上がる時』（2013）
 『生きる力、絵本の力』（2014）
 『自分を見つめる もうひとりの自分』（2016）
 ※このほかに、多くの著書・共編著・翻訳があります。



<生徒諸君に贈る柳田邦男名言集>

◎すべての物を失っても耐えられる心。また出直せばいいと思える強さ。何事にも動じない自分。そうした内面のしなやかさを持つことが、幸せな人生を歩む上での糧となると私は思っています。
 ◎今は不幸だと思っている状況でも、時間が経てばそれが幸福だと思える。今を一生懸命に生きていれば、必ず不幸は幸福へと姿を変える。
 ◎自分の子どもが死ぬという体験をしたことによって、なんかものごとがよく見えるようになったという感じがするんですね。人間がよく見えるようになった。
 ◎学問は興味から、もしくは好奇心からはいったものがもっとも根強い。
 ◎学問は結局世のため人のためでなくてはならぬ。
 ◎想定外は免罪符ではない。
 ※息子の死だけではなく、多くの事故・病気・天災などで亡くなった人々やそれと闘ってきた人々を見てきた柳田邦男の言葉の重みには圧倒されます。

今回お話ししたノンフィクション作家の柳田邦男は、東北地方の伝承を記録した『遠野物語』やカタツムリの呼び名の方言を研究した『蝸牛考』などで有名な民俗学者の柳田國男とは別人！